

脊椎圧迫骨折の治療

整形外科医師 すずきさとし 鈴木智史

超高齢社会に突入した今、国内の骨粗鬆症こつそしょうじょうの患者は1,200万人以上に上ると言われています。骨粗鬆症が進行すると、転んだりした際に骨折するリスクが高くなります。

脊椎は、椎骨と呼ばれる円柱状の骨が、椎間板というクッションを挟んで首(頸椎)から腰(腰椎)まで縦一列につながってできています。骨粗鬆症でもろくなった椎骨が、後ろに倒れて尻餅をついた際などに、つぶれるように折れてしまうのが脊椎圧迫骨折です。

脊椎圧迫骨折は、負荷のかかる胸椎と腰椎の移行部で起こりやすいと言われており、お米や布団など重いものを持ったりしたときや、畑作業や草むしりなど中腰での作業を長時間続けたときなどに起きることもあります。

症状としては、寝ている姿勢から起き上がろうとする瞬間など身体を動かすときに鋭い痛みを伴うのでADL(日常生活動作)の低下を招きます。特に椎体の複数の場所が骨折すると背中が丸くなり、身長も低くなってしまいます。

治療法としては、骨折した部分がそのままの状態

で固まるのを待つ保存的な治療があります。具体的には、2週間程度ベッドで安静にし、痛みがおさまった段階でコルセットを装着することで、やがて起き上がることができるようになります。しかし、保存的な治療の場合、痛みが改善するまでに長い時間がかかるほか、腰が曲がったまま骨が固まってしまったり、逆にいつまでも骨折部が固まらずに痛みが続く偽関節といった状態になることもあります。

保存療法の結果、痛みが残ったり、偽関節となってしまった場合には手術療法を選択します。市民病院では、2011年から保険診療が可能となったバルーン椎体形成術という治療を導入しています。これは、つぶれた椎体をバルーン(風船)を膨らませることで骨折前の状態に近づけ、できた隙間に骨セメント(樹脂)を注入して安定させ、痛みを早く和らげる治療法です。

バルーン椎体形成術は、全身麻酔をした後、ベッドにうつぶせに寝た状態で背中を2か所、1cm程度切開し、レントゲン透視装置を使用しながら行います。

背中や腰の痛みでお悩みの方はお気軽にご相談ください。